

『カターヴァットウ』の論理

清水 元広

I. はじめに

『カターヴァットウ』(*Kathāvattu*, 論事, 以下 *Kv.*) は, 論蔵 (*Abhidhamma-piṭaka*) を形成する七論の 1 つであり, 対論の書である。ニヤーヤ学派の体系中に見られる論理用語の使用¹や, 論法の形式的一貫性により, 従来からその論理性が注目されてきた。本稿では, *Kv.*の論法の形式を取り上げ, これまでの研究成果を紹介しながら, その論理を考察する。とくに, 命題変項を用いて *Kv.*の論法を定式化すべきであるとするシャイエルの, 名辞変項を用いてそうすべきであるとするボヘンスキー両氏の対蹠的な研究内容に焦点が当てられる。近年の研究により支持されているシャイエルの説が, 本稿でも基本的に支持されることになるものの, シャイエルの説すべてが肯定されるわけではない点, 逆にボヘンスキーの説すべてが否定されるわけではない点を明らかにする。

II. 基本的論法

*Kv.*の論法は形式的に一貫している。まず, その基本形式を略述したい。泰本博士も述べているように, *Kv.*の論法を形式的に見ようとすれば, 「小品」(*Mahāvagga*) 第 1 章ブドガラ論 (*puggalakathā*) の中に示される, 論破第一 (*Paṭhamo Niggaho*) から論破第八 (*Atṭhako Niggaho*) まで (*Kv.*, pp. 1-11) を見れば充分である (cf. 泰本 [1960] 33)²。そのうち基本となるのは, 論破第一と第二であって, 第三以下はその特殊な場合である。論破第一と第二の構造は次のとおりである。

論破第一	論破第二
順論五 (<i>anuloma-pañcaka</i>)	逆論五 (<i>paccanika-pañcaka</i>)
返論四 (<i>paṭikamma-catukka</i>)	返論四
論破四 (<i>niggaha-catukka</i>)	論破四
適用四 (<i>upanayana-catukka</i>)	適用四
結論四 (<i>niggamana-catukka</i>)	結論四

論破第三から第五は, 論破第一と同じ構造を持ち, かつ同様の議論を, それぞれ「あまねく」(*sabbattha*), 「常に」(*sabbadā*), 「一切において」(*sabbesu*) という語を付加して展開するものである。論破第六から第八は, 論破第二と同じ構造を持ち, かつ同様の議論を先ほどの語を付加して展開する。以上が基本形式の概略である。

この概略からわかるように, 論破第三以降は, 論破第一と第二に上述の語を加えたものにすぎないので, 論法の形式としては, 論破第一・第二と同じである³。また, 論破第二の構造中, 第一と異なるのは逆論五の部分であるが, この逆論五は形式的に順論五と変わらない。返論四以降は名称も形式も同じである⁴。つまり, 論破第二は第一と形式的には変わらない。したがって, *Kv.*の論法を形式的に見る場合, 論破第一を取り上げればよいのであ

る。

論破第一の最初、順論五は次のようなものである。(対論中の(自)とは、自論師(sakavādin)の略であり、(他)とは、他論師(paravādin)の略である⁵)

1. (自) プドガラは真実のもの・究極のものとして知られるか? / (他) しかり。
/ (自) 真実のもの・究極のものであるから、それゆえにプドガラは真実のもの・究極のものとして知られるか? / (他) けっしてそのように言うべきではない。

(自) 汝は論破を認めよ。もしプドガラが真実のもの・究極のものとして知られるならば、それゆえ実に汝よ、「真実のもの・究極のものであるから、それゆえにプドガラは真実のもの・究極のものとして知られる」と言うべきである。/したがって汝が言うところの、「実に『プドガラは真実のもの・究極のものとして知られる』と言うべきであるが、『真実のもの・究極のものであるから、それゆえにプドガラは真実のもの・究極のものとして知られる』と言うべきではない」とは誤謬である。

さらにもし、「真実のもの・究極のものであるから、それゆえにプドガラは真実のもの・究極のものとして知られる」と言うべきでないならば、また実に汝よ、「プドガラは真実のもの・究極のものとして知られる」とも言うべきではない。/したがって汝が言うところの、「実に『プドガラは真実のもの・究極のものとして知られる』と言うべきであるが、『真実のもの・究極のものであるから、それゆえにプドガラは真実のもの・究極のものとして知られる』と言うべきではない」とは誤謬である。⁶

この順論五の論法に関して、従来の研究により論理性が指摘されている。その論理性については次章で論じることとし、今は引用のみとする。

返論四は順論五と形式的に変わらないので引用はしない。次章で順論五について論じることが、そのまま返論四についても言えることになる。順論五との相違点だけ述べれば、問答の主客が逆転していること(反論がなされる)、問いの内容が若干変わること(今の例で言えば、「……知られるか」→「……知られないか」)、「汝は論破を認めよ」の部分が「汝は返論を認めよ」(ājānāhi paṭikkammaṃ)となること—の3点である。論破四以降の内容は実質的に順論五と返論四の繰り返しと言える⁷ため、本文では取り上げない。

なお、5論全体の構成は、まず反主張が立てられ(順論五)、それに対し反論がなされ(返論四)、論破が加えられ(論破四)、さらに反主張が不当なものとして引用され(適用四)、再び反主張が不当なものとして引用されて、自身の主張が正当であると結論される(結論四)、というものである(論破四以降の内容については、注7を見よ)。全体が5つの部分から成るので、五肢論証(五分作法)との関連が考えられなくもないが、内容がまったく異なっている。またこれまで、それらの展開に論理的必然性のあることは指摘されておらず、本稿でも異論はない。

III. 順論五の論理

1. 従来の研究

前章で論じたことから、基本的論法の中でさらに基本となる部分は順論五と返論四であ

り、また、返論四は形式的に順論五と変わらないので、結果、Kv.の論法中、最も中核となる部分は順論五であるということがわかる。この順論五について、これまでいくつかの研究がなされている。その一部の研究は、他の研究にも言及し批評を加えており、相互の関連を示して興味深い⁸。中心となる研究は、シャイエールとボヘンスキーのものであると言える。本稿冒頭で述べたように、シャイエールは命題変項を用いて Kv.の論法を定式化すべきであると主張し、ボヘンスキーは名辞変項を用いてそうすべきであると主張する。近年の研究⁹はいずれもシャイエールを直接・間接に支持しているが、ボヘンスキーの主張に配慮したうえで、なおシャイエールを支持しているのは泰本博士とジャヤティッレーケーである。中でも、ジャヤティッレーケーは自身の論拠を具体的に示してシャイエールを支持している。さらにボヘンスキーの説は、ジャヤティッレーケーが述べているように、アウンの説を回復したものと言える (cf. Jayatilleke [1963] 412, no. 705)。よって以降では年代順に、アウン、シャイエール、ボヘンスキー、ジャヤティッレーケー4氏の主張を簡単に紹介したい。(なお、この章(「順論五の論理」)で Kv.の論理と言う場合は、順論五の論理を指す)

アウンは、論破第一を名辞変項を用いて分析している (Aung and Mrs. Rhys Davids [1915] xlviii f)。その中で、順論五の結論部分(「汝は論破を認めよ」のあとの文)に破壊的仮言三段論法(否定否定式)の考え方が見られることを指摘している。ただし論法名は語っていない。示された式は次のようなものである。

If A is B , then C is D . (But C is not D .) Therefore A is not B . また、
If C is not D , then A is not B . (But A is B .) Therefore C is D .¹⁰ (*ibid.*)

のちに名辞変項で示されるべきか、命題変項で示されるべきか問題となるものの、前記の論法が順論五の基礎を成していることは事実と言える。

シャイエールは順論五の結論部分を、命題変項を用いて次のように記号化している(前に示した対論で言えば、「ブドガラは真実のもの・究極のものとして知られる」が p 、「真実のもの・究極のものであるから、それゆえにブドガラは真実のもの・究極のものとして知られる」が q)。

$p \supset q \quad \sim(p \cdot \sim q) \quad \sim q \supset \sim p \quad \sim(p \cdot \sim q)$ (Schayer [1933] 91)

さらにここに、 $p \supset q \equiv \sim(p \cdot \sim q)$ という関係(いわゆる「含意の定義」と、 $p \supset q \equiv \sim q \supset \sim p$ という関係(いわゆる「対偶律」)が——そのようにはっきり定式化されていないが——成立していることを指摘している (Schayer [1933] 92)¹¹。

一方、ボヘンスキーは同じ部分を、名辞変項を用いて次のように記述する。

(1) Wenn $A B$ ist, dann ist $A C$; also (2) nicht: (A ist B) und nicht (A ist C); also (3) wenn nicht (A ist C), dann nicht (A ist B). (Bocheński [1978] 489)

((2)の繰り返しとなる(4) nicht: (A ist B) und nicht (A ist C) は記述されていない)

ボヘンスキーがこのように命題を名辞に分解して示す根本の理由は、論議形式が一定の主辞 A (前に示した対論で言えば、ブドガラ)に束縛されているというものである (Bocheński [1978] 489)。しかし Kv.には、一定の主辞 A に相当する語の存在しない場合が普通に見られる。2例だけ挙げれば、次のようなものである(結論部分は省略されている)

ため、問答箇所のみ示す)。

163. (自) 同一のブドガラがこの世界から他の世界へ、他の世界からこの世界へ転生するののか? / (他) しかり. / (自) 手を切断した者は手を切断した者となり, [... ..] 水牛は水牛となるののか? / (他) けっしてそのように言うべきではない——中略
——¹²

また,

(自) このように存在するものが、そのように存在しないののか? / (他) しかり. / (自) 存在の意味は非存在の意味、非存在の意味は存在の意味であり、存在性は非存在性、非存在性は存在性であり、「存在する」は「存在しない」と言い、あるいは「存在しない」は「存在する」と言い、これ(後者)はそれ(前者)であり、[両者は]一義、同一、同様、同類であるか? / (他) けっしてそのように言うべきではない——中略
——¹³

したがって、ボヘンスキーの根本の理由は成立しないことになる。

さらに、シャイエルの説を支持するジャヤティツレーケーの主張に触れたい。その主要な点を略述すれば、次のように言える。すなわち、命題形式で述べられた場合、論議〔の構造〕はとても明白になるうえ、真偽は各命題について言われており、各名辞について言われているのではない、というものである (Jayatilleke [1963] 414, no. 708)。これはもっともな主張である¹⁴。ほかに、ボヘンスキーの名辞論理学的分析が成立しない議論があることや、名辞に分解した部分をやはり命題としてとらえていることをうかがわせる、ボヘンスキーの言があることを述べている (Jayatilleke [1963] 414-415, nos. 708-709)。

以上論じてきたことからすれば、シャイエルの説に分がありそうであるが、以降では、シャイエルの説すべてが肯定されるわけではないこと、逆にボヘンスキーの説すべてが否定されるわけではないことを、2つの観点(「ギリシア論理学への位置づけ」「命題単位で形式化される論理と命題論理学」)から論じつつ、順論五の論理について考察したい。

2. ギリシア論理学への位置づけ

シャイエルの、名辞計算をなすアリストテレスと、命題計算をなすストア学派との対照性を紹介したうえで、Kv.の順論五について考察し、Kv.が命題変項を扱っていることを主張している (Schayer [1933] 90)。さらに、名辞変項を用いたアウンの定義(前出)を、ストア学派の否定否定式 (*modus tollendo tollens*) に当たるものであると述べている (Schayer [1933] 91)。これらは、シャイエルのKv.の論理をストア学派のそれに対応させていることをうかがわせるものである。しかしながらストア[-メガラ]学派¹⁵の特徴は、命題関数子の論理的特性の分析や、そのような関数子から成る分子(複合)命題の真理の吟味などにある (Bocheński [1951] 88)。ここでは現代の命題論理学に通じるものが考究されている。それはとてもKv.には見いだせない特徴である。ストア-メガラ学派の示す論法は、単に対論の中で提示されたものではなく、思考法則の研究を伴う(あるいは、研究に伴う)ものである。

それに対してボヘンスキーは、*Kv*の論理をアリストテレス以前に帰すべきものと断定している (Bocheński [1978] 489)。彼のこの指摘は、以降に示す事実から妥当なものと思なせる。

ボヘンスキーは、アリストテレス以前の時代に行なわれた弁証法について、その弁証法で用いられる推理規則が、命題内部の構造分析なしに、命題間の論理的関係を扱っていることを容易に推測させるものであって、事実、しばしばそう理解されてきたことを伝えている (Bocheński [1978] 37)。ボヘンスキー自身はその理解を否定し、当の推理規則を命題変項によらず、命題内部を分析した形で示している¹⁶。これは *Kv*に対するのと同じである。さらにボヘンスキーは、アリストテレス以前の時代に用いられた弁証法が大部分、帰謬法 (*reductio ad absurdum*) に基づくものであったことを伝えている (Bocheński [1951] 22)。帰謬法は命題変項を用いて簡明に示せる論法である (例えば、 $\sim p \supset q$, $\sim p \supset \sim q \supset p$ や $\sim p \supset q$, $\sim q \supset p$ など)。しかしここでも彼は、弁証法で用いられた原理が、命題論理学の原理ではなく、名辞論理学の規則であったと見ている (Bocheński [1951] 22)。

いずれにしてもここから言えることは、*Kv*のように命題間の論理的関係を扱うことにより、命題単位で展開されると見なされるような論議は、ストア学派の時代にまで下らずとも、すでにアリストテレス以前の時代に見いだされるということである。また、その時代には論理的規則〔あるいは法則〕が意識的に用いられていても、研究はなされていないことが報告されている (Bocheński [1951] 9, 10, 15)。それはまさに *Kv*にも見られる特徴である¹⁷。

さらに言えば、弁証法の大部分が帰謬法に基づくという前述した事実からもわかるように、アリストテレス以前の時代に用いられた推理規則の多くは否定的な結論に至る (Bocheński [1978] 37)。この点でも *Kv*との類似を示している (*Kv*では、基本的に誤謬を指摘する形で終わる)。前アリストテレス期の弁証法は、問答に基づいて論の展開されることが一般である。これも *Kv*との類似点の1つと言える (*Kv*でも、基本的に問答から論が展開される)。弁証法の目的は、何かあることを論破し、反論者により立てられた主張が誤りであることを示すことであった (Bocheński [1978] 37)。それは *Kv*の目的と合致するものである。種々の類似もさることながら、この目的の合致だけを見ても、アリストテレス以前の時代に駆使された弁証法の論理と *Kv*の論理とを対応させることは、まったく妥当であると言えよう¹⁸。

以上のことから、*Kv*の論理をギリシア論理学の中に位置づけるにおいて、ボヘンスキーは当を得ていると思われる。

3. 命題単位で形式化される論理と命題論理学

ボヘンスキーは、*Kv*の論法を名辞変項により定式化していた。だがすでに論じたように、*Kv*の議論には、一定の主辞 *A* に当たる語の存在しない場合が例外的にではなく普通に見られる。ゆえにボヘンスキーの式は *Kv*全般に当てはまるものとは言えない。さらにわれわれは、今述べたことに加え、仮言命題 (もし…ならば…) の量 (「常に」や「時として」な

ど)が問題とされておらず(「常に」であることが暗黙の前提)、真偽は名辞ではなく命題について言われており、論理的関係は命題間にかかわっているという特徴を *Kv.*に見いだす¹⁹。このような場合、命題変項を用いて定式化し、論の構造を簡明に示すのが一般であり、命題内部を分析して定式化する必要はないと言える。仮に分析して示せば、それは簡明に示せるものをわざわざ複雑にしてしまうことになる。ところでボヘンスキーは、アリストテレスによる〔定言〕三段論法の還元操作を命題変項により定式化している(Bocheński [1951] 46-47; [1978] 76-78)。それと同様に、*Kv.*の論法も命題変項を用いて定式化してもよいように思われるのである。

この結果、命題変項を用いたシャイエルの説が支持されるということになる。ただし、シャイエルの主張には注意を要する点もある。すなわち、*Kv.*の論理をストア学派のそれに対応させていることをうかがわせる点と、命題論理学上の2つの法則(含意の定義と対偶律)に関する知識を *Kv.*の作者に帰している点である。第1の点は前節で述べたとおりである。第2の点は次のことから言える。シャイエルは *Kv.*に命題論理学の萌芽(Anfänge)を見(Schayer [1933] 91)、「命題計算の若干の定理に関する知識を予想させる」(die Kenntnis einiger Theoreme des Aussagenkalküls vermuten lässt (Schayer [1933] 91))と語っている。そのうえで彼は、「わたしは十中八九、この2つの法則(含意の定義と対偶律)に関する知識を *Kv.*の作者に帰してよいだろうと思う」(Ich glaube, dass wir die Kenntnis dieser beiden Gesetze dem Verfasser des *Kvu* mit grosser Wahrscheinlichkeit zuschreiben dürfen (Schayer [1933] 92))と述べているのである。

既述のようにストア-メガラ学派は現代の命題論理学に通じる考究をなしており、そこでは命題論理学上の法則が明確に定義されている。よって上の2点は、*Kv.*成立当時に若干の法則が認められ、わずかながらも命題論理学がその当時存在したことを示唆しているように思われる(少なくとも、そのような理解を生じさせる)のである。しかしながら、命題論理学上の法則にかなう論法が展開されていることと、実際に法則が提示されていることには径庭がある。後者においては、思考法則そのものが対象化され、その真理性を考究する学問的態度が要求されるからである²⁰。前者と後者の差はまさに、前アリストテレス期に弁証法を駆使した論者たちと、ストア-メガラ学派の論者たちとの差である。

*Kv.*成立当時に命題論理学上の法則が認められていたことは、次の事実にも照らして受け入れがたい。そもそも *Kv.*はストア-メガラ学派の著わしたような研究書のたぐいではない。また、伝統的形式論理学の祖とされるアリストテレスでさえも、命題論理学上の定理を発見し述べたのはその晩年とされ、しかもわずか4例が報告されているにすぎないのである(Bocheński [1951] 70-71; [1978] 112-113)。さらに、*Kv.*の成立した地域と時代(前3~2世紀。異説あり)、すなわち古代インドに目を向ければ、ギリシアのストア-メガラ学派の書のように、命題論理学の名に値する研究書は知られていない。おそらく、インドの歴史全体を見渡しても見いだせないであろう²¹。したがって *Kv.*の成立当時、すでに他のだれかにより、あるいは *Kv.*の作者自身によって、命題単位で形式化される論理それ自体が研究対象となりその真理性が考察され、若干の法則が認められていたとは考えにくい。

ゆえに、Kv.の作者が命題論理学上の法則を知っていたにしても、それはむしろ、そのような法則に相応する思考パターンを有していたのみと見るべきであり、当時、わずかでも論理の研究がなされていたと解する必要はないであろう。前アリストテレス期に弁証法を駆使した論者たちがそうであったように、Kv.の作者もまた、[正しい]思考法則としての論理を有してはいても、学として論理を考察したとは考えられない。Kv.の作者が有していた基本的な思考パターンは、順論五に着目する限り、「第1の問いが肯定されるならば、第2の問いも肯定されるべきである。第1の問いが肯定され、第2の問いが否定されるというはことない。第2の問いが否定されるならば、第1の問いも否定されるべきである。[第1の問いが肯定され、第2の問いが否定されるというはことない]」というものである²²。したがって、シャイエルの式は思考パターンを定式化したものとして妥当と言える。

ボヘンスキーは、前アリストテレス期には[形式]論理学は存在せず、ただ推理(論理的)規則あるいは法則の意識的適用(使用)が見られることを述べている(Bocheński [1951] 9; [1978] 35)。これと同様にKv.についても、命題論理学上の法則にかなう論法が示されてはいるが、命題論理学そのものは確立されていなかったと言えよう²³。

これまで述べてきたことを簡単にまとめれば、定式化に関しては、命題変項を用いたシャイエルの説が支持され、他方、Kv.の論理をギリシア論理学へ位置づけるにおいては、ボヘンスキーが当を得ている、と言える。ただしボヘンスキーは、名辞論理学上の規則を扱っているとして、前アリストテレス期の弁証法の論理とKv.の論理とを対応させていたが、本稿では、ともに命題間の論理的関係を扱っているという点や、他の種々の類似点に基づいて、その対応を認めることになる²⁴。

IV. 結論

以上、Kv.の論理については次のように言える。基本的論法は形式的あるいは内容的に重複している部分も多く、その展開の仕方に論理的必然性を見いだしがたいものの、最も中核となる部分(順論五、さらに言えば、返論四と逆論五²⁵)には明らかに論理が認められる。その論理は命題単位で形式化されるべきものである。破壊的仮言三段論法(否定否定式)の考え方が基礎にあると言え、また、命題論理学上の2つの法則(含意の定義と対偶律)が成り立っている。しかしそれは、Kv.の成立当時、命題論理学がすでに存在したことを意味しない。Kv.には命題間の論理的関係を扱う思考法が見いだされても、その思考法自体を考究する姿勢はまったく見られず、さらにKv.周辺の時代にさような考究をなした事実や可能性も認めがたいからである。そしてそのようなKv.の特徴は、古代ギリシアにおいて弁証法を駆使した、前アリストテレス期の論者たちのそれに一致するものである。

<略号および使用テキスト>

Kv. *Kathāvattu*, 2 vols., ed. by A. C. Taylor, London: PTS, 1894, 1897; rpt. in one vol., 1979.

- ・論理記号——筆者の表記法 ・変項——斜体
- ・数字——固有名詞, 概数, 慣用語, 副詞などを除き算用数字
- ・括弧——和文: 本文では, 注釈・説明に (), 補足に []; 引用文では, 注釈・説明に { }, 補足に []
 欧文: 本文では, 注釈・説明, 補足ともに (); 引用文では, 注釈・説明, 補足ともに []

※上記のように表記を統一するため, 引用部分を変更している場合がある. なお, 筆者が訳した文は引用文ではなく, 本文として扱う.

(注記)

¹ 泰本 [1960] 39-40, nn. 4-5. 海外の学者 4 人 (ヴィディヤーブーシャナ, カイス, ランドル, ミシュラ) と宇井博士の説が紹介されている. 本稿では, 重複を避けるため, また紙幅の関係もあり取り上げない.

² 注釈書は「八面論法」(aṭṭhamukhā vādayutti) と名づけている (KvA., p. 2).

³ ただし, 「常に」という語の付加された命題が述べられている場合 (論破第四と第七) は, その語を「必ず」という意味に解することで, 様相命題の 1 つである必然命題が示されていると見なせないこともない. しかしながら Kv. の論議は, 真偽のみを問題とする 2 値の論理体系内で理解されるべきであろうし (2 値の論理体系では様相は意味を成さない), 論破第四と第七では, 単に「ブドガラが時間の制約なしに (前・後生の時あるいは生存と死滅の時を通じて (see KvA., p. 17)) 知られるかどうか」を問うているのみと見られることから, 必然命題が示されていると解する必要はないと言える.

⁴ 内容からすると, 逆論五は論破第一の返論四とほぼ同じであり (後者の「汝は返論を認めよ」(ājānāhi paṭikammaṃ) という部分が, 前者では「汝は論破を認めよ」(ājānāhi niggaḥamaṃ) となるのみ), 論破第二の返論四は順論五とほぼ同じである (後者の「汝は論破を認めよ」という部分が, 前者では「汝は返論を認めよ」となるのみ).

⁵ 「自論師」「他論師」という呼び名は注釈書に基づく (初出は, KvA., p. 1). 自論師とは, 言うまでもなく上座部 (Theravāda) のことであり, 他論師とは, 注釈書によれば, 他部派や異教徒 (aññatitthiya (KvA., p. 9)) のことである. 他部派の名は, 議論の主題ごとに異なりさまざまである.

⁶ 1. Puggalo upalabbhati saccikaṭṭhaparamatṭhenāti? Āmantā. Yo saccikaṭṭho paramatṭho tato so puggalo upalabbhati saccikaṭṭhaparamatṭhenāti? Na h' evaṃ vattabbe.

Ājānāhi niggaḥamaṃ: hañci puggalo upalabbhati saccikaṭṭhaparamatṭhena tena vata re vattabbe “Yo saccikaṭṭho paramatṭho tato so puggalo upalabbhati saccikaṭṭhaparamatṭhenāti.” Yaṃ tattha vadesi “Vattabbe kho puggalo upalabbhati saccikaṭṭhaparamatṭhena no ca vattabbe ‘yo saccikaṭṭho paramatṭho tato so puggalo upalabbhati saccikaṭṭhaparamatṭhenāti,’” micchā.

No ce pana vattabbe “Yo saccikaṭṭho paramatṭho tato so puggalo upalabbhati saccikaṭṭhaparamatṭhenāti,” no ca vata re vattabbe “Puggalo upalabbhati saccikaṭṭhaparamatṭhenāti.” Yam tattha vadesi “Vattabbe kho ‘puggalo upalabbhati saccikaṭṭhaparamatṭhena,’ no ca vattabbe “yo saccikaṭṭho paramatṭho tato so puggalo upalabbhati saccikaṭṭhaparamatṭhenāti,” micchā. (Kv., p. 1)

⁷ 泰本博士の示した記号化が如実にこのことを物語っている (cf. 泰本 [1960] 37-38). ただし順論五は、不当なものとして引用されることで否定的に繰り返されている。論じ方はそれぞれ異なっているが、いずれも論理的意義を有するとは思われない。内容は次のようなものである。

〈論破第一・論破四〉

3. Tvañ ce pana maññasi “Vattabbe kho ‘puggalo n’ upalabbhati saccikaṭṭhaparamatṭhena no ca vattabbe ‘yo saccikaṭṭho paramatṭho tato so puggalo n’ upalabbhati saccikaṭṭhaparamatṭhenāti,’” tena tava tattha h’ etāya paṭiññāya h’ evaṃ paṭijānantam h’ evaṃ niggahetabbe; atha tam niggaṇhāma, suniggaḥito ca hosi. (3. (他) しかるに、もし汝が「実に『ブドガラは真実のもの・究極のものとして知られない』と言うべきであるが、『真実のもの・究極のものであるから、それゆえにブドガラは真実のもの・究極のものとして知られない』と言うべきではない」と考えるならば、それゆえ汝がそこ (返論四) において、「[ブドガラは真実のもの・究極のものとして知られない] という」この主張について「[しかり]と」そのように認めていることは、実に以下のように論破されるべきである。そこでわれわれは汝を論破する。そして汝は完全に論破されることになる。(以下、返論四の結論部分(「汝は返論を認めよ」のあとの文)が続く)) (Kv., p. 2)

「しかるに、もし汝が……と考えるならば」という中で引用されている文は、返論四における自論師の主張(他論師の問いに自論師が答えた内容)である。したがって以上の論では、返論四における自論師の主張と他論師の論破とが繰り返されていると言える。論破されるべきであると主張しているものの、なぜ論破されるべきか理由が述べられているわけではない。

〈論破第一・適用四〉

4. Ese ce dunniggaḥite, h’ evameva tattha dakkha; Vattabbe kho “Puggalo upalabbhati saccikaṭṭhaparamatṭhena,” no ca vattabbe “Yo saccikaṭṭho paramatṭho tato so puggalo upalabbhati saccikaṭṭhaparamatṭhenāti,” no ca mayaṃ tayā tattha h’ etāya [text pati°]paṭiññāya h’ evaṃ paṭijānantā h’ evaṃ niggahetabbā; atha maṃ niggaṇhāsi dunniggaḥitā ca homa. (4. (他) もしこれが不当に論破されたものであるならば、汝はそこ(順論五)における[汝の論破をも]同様に[不当なもの]と見よ。[われわれによれば、]「実に『ブドガラは真実のもの・究極のものとして知られる』と言うべきであるが、『真実のもの・究極のものであるから、それゆえにブドガラは真実のもの・究極のものとして知られる』と言うべきではない」。しかしわれわれがそこ(順論五)において、「[ブドガラは真実のもの・究極のものとして知られる]という」この主張について「[しかり]と」そのように認めていることは、汝によりけって以下のように論破されるべきではない。そこで汝がわれを論破するも、われわれは不当に論破さ

れたのである。(以下、順論五の結論部分(「汝は論破を認めよ」のあとの文)が続く)(Kv., p. 3)

以上の論は、他論師自身の主張(順論五で自論師の問いに答えた内容)を先に提示したあと、その主張に対する自論師の論破を不当なものとして引用している。しかし、自論師の論破がなぜ不当なのか説明がなされているわけではない。ここでは、順論五における他論師の主張と自論師の論破とが繰り返されていると言える。

〈論破第一・結論四〉

5. Na h' evaṃ niggaḥetabbe, tena hi yaṃ niggaṇhāsi—[. . .]—tena hi ye kate niggahe se niggahe dukkate sukate paṭīkamme, sukataṃ paṭīpādanā ti. (5. (他) けっしてそのように論破されるべきではない。それゆえ実に汝が論破するところの——(以下、順論五の結論部分が続く)——と、実にそのようになされた論破は不当になされた論破である。[しかし、わが] 返論は正しくなされ、[わが議論の] 続きは充分になされたのである)(Kv., p. 4)

ここでは、順論五における自論師の論破を引用し、その論破を不当、自身の主張を正当と結論しているのみであり、不当あるいは正当である理由は述べられていない。

⁸ 略述すれば次のようである。シャイエは名辞変項を用いたアウンの分析を支持せず、命題変項により分析すべきことを主張している(Schayer [1933] 91)。一方、ボヘンスキーは、Kv.の論理性を認めないランドルの説(Randle [1930] 13-14)を退け、さらにシャイエルを行き過ぎと見なし、名辞変項による分析を行なっている(Bocheński [1978] 488)。泰本博士はシャイエル、ボヘンスキー両氏の説を紹介しており、シャイエルによる順論五の分析に倣い、論破第一と第二すべてを命題変項により定式化し、シャイエルの大胆な試みが当を得ているように思われると述べながらも、詳細は他日に譲っている(泰本 [1960] 37ff)。ジャヤティッレーケーも、シャイエル、ボヘンスキー両氏の説を紹介しつつシャイエルの説を支持し、さらにその理由について論じている(Jayatilleke [1963] 412ff)。市村博士はアウンの分析を的確でないとし、シャイエルの説に触れてはいないものの、シャイエルと同様の分析を行なっている(Ichimura [1991] 20, 22-23)。

なおこのほかに、他の研究との関連は見いだされないが、先行研究として宇井博士、工藤博士、渡辺博士のものが挙げられる。宇井博士はKv.に仮言命題の適用が見られるとしつつも、実際の応用論述は形式的法則的でなく、論証的には無用蛇足の繰り返しであるとする。その一方で、Kv.の論述を形式的に研究すれば、進歩した法則が得られると述べている(その法則については説明なし)(宇井 [1929] 217)。工藤博士は、Kv.の論法に関して、2つの問いのあと仮言三段論法が構成され、前件肯定、後件否定による真偽の吟味がなされることを述べている。ただし、変項を用いた分析は行なっていない(工藤 [1968] 389)。渡辺博士は、泰本博士と同じく、順論五を含め論破第一と第二を命題変項により定式化している(Watanabe [1983] 159-164)。

⁹ 泰本 [1960] ; Jayatilleke [1963] ; Watanabe [1983] ; Ichimura [1991]。

¹⁰ 2番目の式は、順論五の結論部分後半、「さらにもし……と言うべきでないならば、……とも言うべきでない」という箇所を定式化したものである。しかしその箇所は構成的仮言

三段論法（肯定肯定式）として解釈し直すこともできる。仮にアウンに従って名辞変項により定式化するとすれば、“If C is not D , then A is not B . (But C is not D .) Therefore A is not B ”となる。命題変項を用いれば、 $\sim q \supset \sim p$, $\sim q \vdash \sim p$ である。というのも、前に示した順論五の例で言えば、自論師が真に結論したいのは、「ブドガラが真実のもの・究極のものとして知られる」のではないこと、すなわち第1の問いの否定であると言えるため、「さらにもし」云々という部分は、次のようなパターンで論じられているとも解せるからである。「第2の問いが否定されるならば、第1の問いも否定されるべきである。第2の問いが否定される。ゆえに第1の問いも否定される」。なお、工藤博士は Kv . に前件肯定の仮言三段論法が見いだされることを述べている（工藤 [1968] 389）。

¹¹ 渡辺博士も、 $p \supset q$ と $\sim(p \cdot \sim q)$ と $\sim q \supset \sim p$ の同値性を指摘している。ただし、法則名は語っておらず、さらに $\sim p \vee q$ （順論五では直接言及されていない）も同値に加えている（Watanabe [1983] 159）。

¹² 163. Sv' eva puggalo sandhāvati asmā lokā param lokam paramā lokā imam lokan ti? Āmantā. Hatthacchinno hatthacchinno va hoti, mahiso mahiso va hotīti? Na h' evam vattabbe—pe— (Kv ., p. 31)

¹³ S' ev' atthi s' eva n' atthīti? Āmantā. Atthaṭṭho n' atthaṭṭho n' atthaṭṭho atthaṭṭho, atthibhāvo n' atthibhāvo n' atthibhāvo atthibhāvo, atthīti vā n' atthīti vā n' atthīti vā atthīti vā, esese ekaṭṭhe same samabhāge tājāte ti? Na h' evam vattabbe—pe— (Kv ., p. 159, no. 1)

¹⁴ ただし、前に挙げた式を見ればわかるように、ボヘンスキーは否定辞“nicht”を賓辞に掛けてはいない。よってボヘンスキーもまた、命題を名辞に分解しながらも、真偽が命題について言われていることを明確にとらえていたと言える。

¹⁵ 「ストア学派」を「ストア-メガラ学派」と呼んだほうがよいことに関しては、Bocheński [1951] 78-79; [1978] 122 を見よ。以降、本稿では、「ストア学派の」(stoisch) と記すシャイエルの説に触れる場合を除き、「ストア-メガラ学派」という呼称を用いる。

¹⁶ Bocheński [1951] 16-17; [1978] 38-39. 1例を挙げれば、次のようなものである。

Wenn A dem x zukommt, dann kommen auch B und C dem x zu; nun kommen aber B und C dem x nicht zu; also kommt auch A dem x nicht zu. (Bocheński [1978] 38)

他方の書では、同じ推理規則を $Ax \supset Bx \cdot Cx$, $\sim(Bx \cdot Cx) \vdash \sim Ax$ というように、述語論理学の記号により定式化している（Bocheński [1951] 16）が、いずれの記述も命題変項を用いれば、 $p \supset q$, $\sim q \vdash \sim p$ となる。

¹⁷ ボヘンスキーは Kv . の論法に関して、特定の形式論理学上の規則が意識的に用いられているだけでなく、ほぼはつきりと定式化されていることを述べている（Bocheński [1978] 488）。実は、先ほど挙げたボヘンスキーの報告のうち最初の箇所では、[研究がなされていないだけでなく、] 定式化がなされていないことも述べられている（Bocheński [1951] 10）。よって、定式化ということに関しては、前アリストテレス期の弁証法と Kv . の論法とのあいだに差異があるとも言える。しかしながら、論理学上の規則の意識的適用（使用）と定式化との区別がいまひとつ判然としないため、定式化については不問に付したい。

¹⁸ ミシュラは、Kvに見られる推理や論議の方法が、紀元前 3 世紀における高度な弁証法 (dialectics) の性質をはっきり示していることを述べている (Mishra [1957] 467)。

¹⁹ 最後の 2 つの特徴に関しては、「従来の研究」で取り上げたジャヤティッレーケーやシャイエルの主張を見よ。

²⁰ ボヘンスキーは、アベラルド (Abälard, 1079-1142) の言として、「すなわち論理学とは、論議を単に使用し構成する学問なのではなく、なぜ一部は有効であり他は無効であるか、それ (論議) を正しく区別し評価する学問である」(Logik ist nämlich nicht eine Wissenschaft, die Argumente nur gebraucht und ordnet, sondern sie unterscheidet sie und schätzt richtig ab, warum manche gültig, andere ungültig sind (Bocheński [1978] xxi)) という主張を挙げている。

²¹ ボヘンスキーは「インド論理学はほぼ完全に命題論理学を欠いているように思われる」(der indischen Logik scheint fast vollständig die Aussagenlogik zu fehlen (Bocheński [1978] 517)) と述べ、上田博士はその言を至当な判断としている (上田 [2001] 125)。

²² この思考パターンはあくまでも、「2 つの問いがなされ、第 1 の問いは肯定され、第 2 の問いは否定される」という基本形におけるものである。Kv.には、問いが 3 つ、4 つ続いたり、返答が肯定のみであるなど、基本形に当てはまらない論議も見られる。その場合、言うまでもなく当パターンは該当しない。

²³ 命題単位で命題間の論理的関係を扱う思考法が命題論理学に先行してもかまわないであろう。その場合、論理的妥当性は学問的に支えられているのではなく、常識や直観に基づいていると見なせる。仲本博士は、[命題間の論理的関係を扱う] 仮言三段論法の成立が常識により判定され、その真の証明は命題論理学によって行なわれると言い (仲本 [2001] 71)。ウカシェーヴィッチは、アリストテレスが命題論理学上の諸法則、すなわち「対偶律」($\alpha \supset \beta \equiv \sim \beta \supset \sim \alpha$) や「推移律」(原文は “the laws of the hypothetical syllogism” ([純粹] 仮言三段論法の法則)) ($(\alpha \supset \beta) \cdot (\beta \supset \gamma) \supset (\alpha \supset \gamma)$) を直観によって使用していたことを述べている (Łukasiewicz [1957] 49-50)。ただし、対偶律については定理として知っていた可能性もある。本文で述べたようにアリストテレスは晩年に命題論理学上の法則を 4 つ定義しており、その中に対偶律が含まれているからである (Bocheński [1951] 70 ; [1978] 112)。

²⁴ 「命題論理学上の規則を扱っている」と明言せず、また「命題間の論理的関係を扱っている」という言の前に「命題単位で」という語を加えないのは、弁証法の論理が命題単位で形式化されるものであると即断できないからである。というのも、弁証法において、一定の主辞の示される傾向が支配的であることや、仮言命題の量が問題とされていたり、真偽が名辞について言われていたりする傾向のあることを、現段階で完全には否定できないためである。もっとも、筆者は Kv.と同様に解せると見ている。

²⁵ 本稿では、順論五に限定して論じたが、同じ形式を持つ返論四と逆論五にも同様のことが言える。

(参考文献)

Aung, S. Z. and Mrs. Rhys David

[1915] *Points of Controversy; or, Subjects of Discourse: Being a Translation of Kathā-vatthu from the Abhidhamma-piṭaka*, London: PTS. <アウン>

Bocheński, I. M. [1951] *Ancient Formal Logic*, Amsterdam: North-Holland Publishing Company. (J・M・ボヘンスキー [1980] 『古代形式論理学』 論理学古典選集 2, 岩野秀明訳, 東京: 公論社) <ボヘンスキー>

Bocheński, J. M. [1978] *Formale Logik*, 4 Aufl., Freiburg: Verlag Karl Alber. (1 Aufl., 1956) (Bocheński, I. M. [1970] *A History of Formal Logic*, 2nd ed., tr. and ed. by Thomas, I., New York: Chelsea Publishing Company. (1st ed., 1956)) <ボヘンスキー>

Ichimura, S. [1991] “Ābhidharmika Logical Deadlock in *Kathāvatthu* and Nāgārjuna’s *Madhyamaka Dialectic*,” *JIBS*. (『印仏研』), vol. 39, no. 2, Tokyo: Japanese Association of Indian and Buddhist studies, pp. 20-24. <市村>

Jayatileke, K. N. [1963] *Early Buddhist Theory of Knowledge*, London: George Allen & Unwin Ltd. <ジャヤティッレーケー>

Keith, A. B. [1921] *Indian Logic and Atomism: An Exposition of the Nyāya and Vaiśeṣika Systems*, Oxford: Clarendon Press. <カイス>

Law, B. C. [1940] *The Debates Commentary*, Oxford: Pali Text Society.

Lukasiewicz, J. [1957] *Aristotle’s Syllogistic from the Standpoint of Modern Formal Logic*, 2nd ed. enlarged, Oxford: Clarendon Press. (1st ed., 1951) <ウカシェーヴィッチ>

Mishra, M. U. [1957] *History of Indian Philosophy*, vol. 1, Allahabad: Tirabhukti Publications. <ミシュラ>

Randle, H. N. [1930] *Indian Logic in the Early Schools: A Study of the Nyāyadarśana in its Relation to the Early Logic of Other Schools*, London: Oxford University Press. <ランドル>

Schayer, St. [1933] “Studien zur indischen Logik II,” *Bulletin international de l’académie polonaise des sciences et des lettres: Classe de philologie, classe d’histoire et de philosophie*, Cracovie: Imprimerie de l’université, S. 90-96. <シャイエール>

Vidyābhūṣaṇa, S. C. [1921] *A History of Indian Logic: Ancient, Mediaeval and Modern Schools*, Calcutta: Calcutta University. <ヴィディヤーブーシャナ>

Watanabe, F. [1978] “A Study of the *Puggala* Chapter in the *Kathāvatthu* and the *Vijñāyākāya*,” *Buddhist Studies* (『佛教研究』), no. 7, Hamamatsu: International Buddhist Association, pp. 105-130.

[1983] *Philosophy and its Development in the Nikāyas and Abhidhamma*, Del-

hi: Motilal Banarsidass Publishers. <渡辺>

- アリストテレス [1970]『詭弁論駁論』宮内璋訳, 東京: 岩波書店.
[1971]『分析論前書』井上忠訳, 東京: 岩波書店.
- 宇井伯壽 [1929]『印度哲學研究』5, 東京: 甲子社書房.
- 上田昇 [2001]『ディグナーガ, 論理学とアポーハ論——比較論理学的研究』,
東京: 山喜房佛書林.
- 工藤成樹 [1968]「論事に見られる論議道」『印仏研』16-2, 東京: 日本印度學佛
教學会, pp. 386-390.
- 佐藤密雄訳著 [1991]『論事附覚音註』, 東京: 山喜房佛書林.
- 佐藤密雄・佐藤良智訳著
[1939]『論事』南傳大藏經 57-58, 東京: 大藏出版社.
- 仲本章夫 [2001]『論理学入門』東京: 創風社.
- 林五邦訳注 [1932]『邦譯カターヴァットゥ——『論事』完譯』上下巻, 名古屋:
破塵閣書房.
- 泰本融 [1960]「カターヴァットゥにおける名辭論理學」『印仏研』8-2, 東京:
日本印度學佛教學会, pp. 32-42.

本稿を執筆するに当たり, 目白大学の上田昇先生から貴重なご教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

2002.12.18 稿

しみず もとひろ 東京大学大学院博士課程

The *Kathāvatthu* (*Kv.*) is one of the seven works which make up the *Abhidhamma-piṭaka*, and it is the work dealing with debate which begins with questions and answers. Its logicalness has hitherto attracted scholars' attention for the reason that it has formal consistency in its lines of argument. In considering especially the logic (not the science but the laws of thought for constructing argument forms) of the *Kv.*, this paper focusses on the contrasting contents of the studies by St. Schayer and J(I). M. Bocheński.

First, a basic line of argument is considered. Here the following facts are shown: (i) the part named *anuloma-pāñcaka* is the most fundamental regarding form; and (ii) it is difficult to discover logical significance in most of the basic lines of argument because many parts can be said to be redundant and do not seem to be arranged with logical necessity.

Next, the focal point is to consider the logic of the *anuloma-pāñcaka*. According to S. Z. Aung, the way of thinking which is in accord with the mixed hypothetical syllogism denying the consequent (*modus tollendo tollens*) is found in the *anuloma-pāñcaka*. Schayer points out that two laws of propositional logic (the definition of implication and the law of contraposition) exist in the same part, and this makes the logic of the *Kv.* correspond to the logic seen in the studies of the Stoics of ancient Greece. Schayer, however, does not accept Aung's analysis using terminal variables, and maintains that propositional variables should be used, considering the logic of the *Kv.* to be formalized per proposition. Bocheński, on the contrary, in accordance with his view that the logic of the *Kv.* is formalized per term, asserts that terminal variables should be used, and that the logic of the *Kv.* is correspondent to that of dialectics in the pre-Aristotelian period of ancient Greece.

The present writer judges Bocheński's opinion to be correct about the placing of the logic of the *Kv.* in the developmental stages of Greek logic. It is not, however, the case that, following his assertion, the above correspondence is accepted within the framework of terminal logic. The acceptance is based on various similarities, one of which is that both the *Kv.* and the dialectics of the pre-Aristotelian period treat of the logical relationship between propositions.

On the other hand, the present writer supports Schayer regarding his interpretation of the logic of the *Kv.*, and considers it to be formalized per proposition. The main reasons are as follows: (i) cases with no fixed subject are often found in the *Kv.*; (ii) the quantity of the hypothetical proposition is not made into a problem; (iii) truth or falsity is predicated not of terms but of propositions; and (iv) the logical relationship is between propositions and not terms. Therefore, it can be said that a method of argument conforming to the laws of propositional logic is being used in the *Kv.*. However, based on several facts, this paper judges that the science of propositional logic did not exist in the period when the *Kv.* was composed, just as it did not exist in the pre-Aristotelian period of ancient Greece.